

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

虎の門病院下部消化管外科での研修を終えて

獨協医科大学埼玉医療センター外科

大井 悠

日本臨床外科学会国内外科研修として、2020年10月12日から23日の約2週間、虎の門病院で下部消化管外科を研修させていただきました。虎の門病院の下部消化管外科は、昨年度（2019年）の手術件数が450例に上り、そのほとんどを腹腔鏡下手術で行っており、下部消化管外科を専門とする私にとって一度は研修してみたい施設でした。日常の臨床に追われる中で長期間の研修が難しい私にとって、2週間の研修の機会は大変貴重なものでした。

虎の門病院の下部消化管外科の週間スケジュールですが、週3回の各種カンファレンス、連日7時半から回診を行っており、終わり次第午前中から手術という流れでした。カンファレンスのスケジュールは下記の如くでしたが、私は研修中の2週間、各種カンファレンスや様々な手術に参加させていただきました。

月曜日：7時30分、消化器外科カンファレンス

木曜日：8時、消化器外科カンファレンス

金曜日：15時、下部消化管キャンサーボード

金曜日のキャンサーボードでは腫瘍内科や放射線科と合同での症例検討などが行われていました。月曜日・木曜日の消化器外科カンファレンスでは、下部消化管外科だけでなく、上部消化管、肝胆膵を含む消化器外科の全手術症例の術前検討が行われていました。術前検討は、レジデントが事前にサマリーを作成しており、短い時間でしたが、非常に洗練された内容でした。

研修中に見学、参加させていただいた予定手術症例は、腹腔鏡下結腸右半切除術、結腸左半切除術、S状結腸切除術、前方切除術、ロボット支援下前方切除術など多岐にわたり、さらに緊急手術も下部消化管穿孔や絞扼性イレウス、虫垂炎など多数行われておりました。

虎の門病院の手術室は、麻酔科、コメディカルのスタッフとのコミュニケーションも非常に良好であり、全員が行うべきことを理解し、入室から帰室まで滞りなくスムーズに行われておりました。この環境でこそ初めて、膨大な数の手術を実施できるのだと実感しました。

実際に虎の門病院の手術を見学して感じたことですが、レジデントも積極的に手術に参加しており、所々でスタッフの方々が助力することで、非常に丁寧な手術操作が、最初から最後まで滞ることなく行われているということがあります。手術は拡大手術も多く、困難症例も少なくないのですが、術前管理から術後管理、手術のすべてで定型化が完全に行われている結果、手術に参加するメンバーの成熟したチームワークが実現できているのだと思いました。

印象に残っているのは、一例一例を大切に真摯に癌治療に取り組んでいるスタッフの方々の情熱と、それにしっかり答えよう、ついでいこうとするレジデントの勉強熱心な姿勢です。私自身の今後の診療に対するモチベーションを高めることができました。

手術で非常に印象に残っているのは、腹腔鏡下結腸左半切除術、低位前方切除術です。今まで私には『見えていただけ』であった景色を、虎の門病院の方々は常に、言葉で具体的に説明していました。そうすることで知識や剥離層の共通認識が出来上がり、手術の定型化や安全性の向上、手術時間の短縮が可能となっているのだと思いました。手術の基本は『Anatomy』である点を再認識した2週間でした。

短い期間ではありましたが、とても貴重な経験をさせていただきました。今回の経験を私個人の手術手技向上だけでなく、当センターの手術全体のレベルアップに役立てていければと考えております。最後に、宇田川晴司先生、黒柳洋弥先生、下部消化管外科スタッフの皆様、虎の門病院研修担当の皆様、このような機会を与えていただいた日本臨床外科学会に深く感謝申し上げます。